

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	金子 迪大
論文題目	対人関係におけるウェルビーイングの低下が摂食行動につながる心理的メカニズムの検討		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、対人関係におけるウェルビーイングの低下が摂食行動につながる心理的メカニズムについて、個人特性との関連も含めて、行動実験、fMRIに基づく脳画像計測実験、質問紙調査に基づき心理学的検討を行ったものである。論文は6章、4つの研究から構成されている。</p> <p>第1章「ウェルビーイング研究から観た所属欲求と食欲」では、近年のウェルビーイング研究を概観し、未検討な事項として、ウェルビーイング・フラグメントの関係を明らかにすることがポジティブ因果ネットワークを解明することにつながる」と述べている。その上で本研究では所属欲求と食欲という基礎欲求に焦点を当て、所属欲求が満たされない時の食欲の増減について解明することが本論文の目的であると述べている。</p> <p>第2章「研究1：排斥が空腹感に及ぼす影響の検討」では、大学生41名に対して、サイバーボール課題を用いた心理学実験を行い、社会的排斥後の空腹感の増加について検討した。その結果、社会的排斥後に空腹感が増加することを示している。</p> <p>第3章「研究2：社会的排斥後の摂食量に対する特性所属欲求の調整効果の検討」では、大学生98名に対して、社会的排斥後の摂食量が特性所属欲求によって調整されるかを検討した。その結果、特性所属欲求が低い参加者において摂食量が増加することを示している。</p> <p>第4章「研究3：fMRIを用いた社会的排斥後の笑顔と食べ物への報酬反応の検討」では、大学生・大学院生48名に社会的排斥後の他者の笑顔とおいしそうな食べ物への報酬系の活性化増加をfMRIを用いて検討した。その結果、笑顔が予測される時に予測されない時と比べて報酬系が活性化することを示している。</p> <p>第5章「研究4：暴食に対する対人葛藤の影響と特性所属欲求の調整効果の検討」では、研究4-1および4-2として、対人葛藤と暴食傾向の関係を特性所属欲求が調整するかをそれぞれ大学生266名、成人416名を対象にweb調査で検討した。その結果、特性所属欲求が高い参加者において、対人葛藤が多いほど暴食傾向を示した。</p> <p>第6章「総合考察」では、研究1から研究4までの結果を総括し、さらに、所属欲求と食欲の関係およびウェルビーイングについての考察を行い、本研究の限界と将来の方向性の検討をしている。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、対人関係におけるウェルビーイングの低下が摂食行動につながる心理的メカニズムを解明するために、行動実験と脳画像計測実験、オンラインの質問紙調査を用いた4つの研究に基づいて、検討、考察したものである。

本論文の特色は以下の3点である。

- (1) 従来のウェルビーイング研究では十分に解明されていない、ポジティブ因果ネットワークについて、対人関係のウェルビーイング・フラグメントが満たされないことが、摂食のフラグメントに影響する心理的メカニズムを、特性所属欲求の個人差との関連において、体系的に検討している点で、ウェルビーイングの心理学的研究に理論的インパクトをもつ点
- (2) 社会的排斥による摂食行動の変化の背後にある心理的メカニズムを実証的に解明するために、(a)社会的排斥を操作して摂食行動の変化を明らかにする実験課題を用いた点、(b)空腹感、摂食量、脳の報酬系の活性化、暴食傾向などの摂食行動に関わる多様な従属変数を用い、摂食行動への影響を測定した点、(c)所属欲求という対人関係のウェルビーイングに関わる心理特性の個人差を調整変数として導入した点、(d)行動実験、脳画像測定、オンライン調査という多角的手法を用いた点で、方法論上のインパクトをもつ点
- (3) 暴食や肥満の防止、さらに、個人のウェルビーイングを高めるための心理的メカニズムについての実証的基礎研究として、多くの示唆をもつ点

第1章では、ウェルビーイング研究をめぐる学術的背景として先行研究を概観し、ポジティブ因果ネットワーク解明のために、ウェルビーイング・フラグメントの関係を明らかにすることが大切であることを論じ、所属欲求が満たされない時の食欲の増減を解明することに焦点を絞り、その解明を目指したところに本研究の着眼点の鋭さが現れている。

第2章の研究1では、対人関係における社会的排斥をサイバーボール課題で操作した結果、実験参加者の空腹感が増加することを示している。排斥を受けた時に摂食量が増加することは知られていたが、その先行要因となっている空腹感も高まっていることを実証したことは、この研究分野における重要な貢献である。

第3章の研究2では、社会的排斥後の摂食量が特性所属欲求によって調整されるかを検討した結果、特性所属欲求が低い参加者において摂食量が増加することを示している。これは、「特性所属欲求の高い人が低い人よりも排斥後に摂取量が増える」という仮説とは逆の結果である。考察において、所属欲求の高い人は摂食ではなく関係性再構築のために資源を再配分し、一方、所属欲求の低い人は摂食に焦点を当てたという目標駆動型資源再配分理論から説明し、さらなる実験的検討が必要なことを指摘した点は、学術的意義をもつ。

第4章の研究3は、fMRIを用いた脳画像計測実験の結果、社会的に排斥された参加者において、他者の笑顔の画像が予測される時は予測されない時と比べて報酬系が活性化し、おいしそうな食べ物の画像では同様の活性化は観察されないことを示している。この結果が、研究1、研究2と矛盾する点について、同一セッションでの笑顔画像と食べ物画像の呈示による影響についての議論は、今後の実験的検討において重要な指針となる考察である。

第5章の研究4における2つの調査は、日常生活における対人葛藤頻度が、特性所属欲求の高い回答者において、暴食傾向に影響することを示した。このことは、研

究 2 と矛盾するが、研究 2 における急性的な所属欲求非充足によるストレスは食欲低下を引き起こし、研究 4 における慢性的な所属欲求非充足によるストレスは食欲向上に関与する可能性を考察している。これらは、実験室研究の成果を日常生活に拡張した点で、学術的にも社会的にも意義ある成果である。

第 6 章は、本研究で検討した 4 つの研究の成果を総括し、ウェルビーイング分野におけるこの研究の意義を明確化し、さらに、本研究の限界と将来の方向性を述べている。これらの点で、心理学のウェルビーイング研究としての学術的意義が大きい。

以上のように本論文は、社会的排斥が摂食行動につながる心理的メカニズムを解明するために、工夫した多角的手法による実証データを積み重ね、考察を深め、ポジティブ因果ネットワークにおける所属欲求という調整変数に着目して、体系的な検討を行うことによって、理論面と方法面、応用面でインパクトのある多くの新たな成果をあげている。

今後に残された問題として、一部は論文中でも論じられ、試問でも議論されたことがらとして、以下の点が指摘できる。

- (a) ポジティブ因果ネットワークの全体像を明らかにするために、所属欲求と食欲に加えて、他のウェルビーイング・フラグメント間の関係や階層性についての検討
- (b) 社会的排斥を操作するサイバーボール課題のパラダイムとしての問題点や参加者内要因で行う問題点の検討、実験状況において参加者が取りうる再配分資源の検討、多くの欲求を取り上げる横断調査や、一連のメカニズム解明のための縦断調査や経験サンプリング法などの新たな手法の検討
- (c) 所属欲求非充足の短期的影響と長期的影響の関係、状況変数、セルフコントロール、ネガティブ感情、孤独感、他の個人差変数、精神的健康などとの関連性の検討
- (d) 個人差や状況を踏まえた個別最適な幸せの追求、暴食や肥満の防止などの応用の検討

しかし、こうした点は、本論文で見出された多くの新しい知見の価値を損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和 5 年 8 月 21 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第 1 4 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 5 年 9 月 26 日以降